

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 27 年 5 月 17 日現在

機関番号：62501

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2013～2014

課題番号：25884093

研究課題名(和文) 明治維新と武家の北海道移住に関する研究

研究課題名(英文) The study about Hokkaido migration by the samurai family in the early Meiji era

研究代表者

三野 行徳(MINO, YUKINORI)

国立歴史民俗博物館・大学共同利用機関等の部局等・研究員

研究者番号：30714224

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、北海道へ移住した武家3家(巨理伊達家・片倉家・富江五島家)を対象に、その移住と、移住後のあらたな共同体の形成過程を検討することを目的とする。2年間の研究により、武家の北海道移住が武家社会解体過程と密接に連動していることが明らかとなった。また、移住武家(当主・家臣団)と、移住先の地域社会(場所請負商人・アイヌ・和人)との間で構築される新たな関係構造のモデル化を、巨理伊達家について行い、明治初年の北海道分領支配についての再検討の視座を獲得した。

研究成果の概要(英文)：This study is intended to examine an emigration process and the formation process of the new community after the emigration among three samurai family (the the the Watari Dates, Katakuras, Tomie Gotos) which emigrated to Hokkaido. As result of the study for two years, it was revealed that the Hokkaido emigration of the samurai family linked samurai family society dismantling process closely. In addition, I did the modeling of the new relative built between an emigration samurai family (lord - vassal) and the community (merchant - Ainu, Japanese) of the emigration place among the Watari Date family. And I got point of view of the reexamination about the Hokkaido territory rule of the Meiji early years.

研究分野：日本史(近世史・近代史)

キーワード：明治維新 武家 北海道移住 アイヌ 場所請負制度 士族

## 1. 研究開始当初の背景

明治維新にともなう武家の北海道移住は、これまで(武家の苦難の)「開拓史」として理解・表現されてきた。これは、明治維新の結果敗者となった武家が、苦渋の選択として旧地を離れて北海道への開拓移住を余儀なくされた歴史過程や、寒冷地での不慣れな開拓過程を、近代社会のなかでの武家の没落過程として(武家を主語に)描き描かれてきたことによる。一方で、近年のアイヌ史の進展に伴い、近代以降の暴力的なアイヌ政策の実態が明らかとなり、開拓史ではなく被侵略史として、制度史にとどまらないアイヌを主語とした北海道近代史が明らかとなりつつある。しかし、前者が明治初年の移住期を中心とするのに対し、後者は1880年代以降を主たる対象としており、両者が結び合う研究状況には無い。また、「開拓史」においてほぼ無視されているアイヌと和人(場所請負商人・三官寺)との関係は、近世史において近年大きな成果を挙げているが、近世段階のアイヌと和人との関係が、維新後に移住してくる武家集団との間でどのような関係を結んだかの解明が、大きな課題として残されている。すなわち、武家の「苦難の開拓史」ではなく、明治維新に伴う大規模移住によって惹起される「新たな関係史」としてこの間の歴史を検討する必要がある。

私はこれまで、明治維新後の武家・武士の解体・変容・社会移動(進出)を、江戸幕府の旗本・御家人を対象に研究してきた。明治維新後の武家は、「家」の解体と単身化を経験しつつ、「家」の維持のために培われてきたさまざまな資本により多様な対応を見せ、それは単に没落や官僚として栄達するといったイメージに包摂されないものだったことを明らかにした。また、国立歴史民俗博物館において2010年企画展示「武士とは何か」において幕末から明治期の武家を担当したが、そのなかで、北海道へ移住する武士団が全国諸階層にわたって存在しており、その多くがアーカイブズの移動を伴っていること、「開拓史」と呼ばれる特有の歴史像を形成していること、近世アイヌ研究との連関が不十分なことを認識した。同時に、北海道へ移住した武士団は、日清日露戦争下で独自のいわば近代的武士意識を集団として醸成していたことがわかった。以上の研究活動から、明治維新直後の「開拓史」のなかでのアイヌ(+和人)不在の問題は、移住に伴って発生するアーカイブズの予断にとらわれない復元的検討から、克服できるとの見通しを得るに至り、本研究を申請するにいたった。

## 2. 研究の目的

本研究は、北海道へ移住した武家3家(仙台藩家門巨理伊達家・仙台藩一家片倉家・江戸幕府旗本交代寄合富江五島家)を対象に、その移住の過程と、移住後のあらたな共同体の形成過程を検討することを目的とする。この

さい、移住によって惹起される新たな「関係」と、移住によって「分断」される「記憶装置=アーカイブズ」に留意して検討を進めたい。上記3家は、移住にさいし、何らかの選別をしたうえでアーカイブズ(文物)を北海道へ持ち込んでおり、3家に関するアーカイブズは、旧領地と北海道の移住先とに分断して現存している。これらアーカイブズは中世末期から近世・近代の各家の記憶を伝える物である一方、移住にともなって移住先で惹起された新たな関係を克明に記録している。また、この記録は、移住後、屯田兵や近代戦争、高度経済成長という過程を経て現在に至るまで、固有の役割を果たしていた。本研究は、特に現在に至る伝来過程に注目して、上記3家のアーカイブズを悉皆調査することにより、武家の北海道移住が惹起する新たな関係と、武家のアーカイブズの歴史的役割を検討するものである。

## 3. 研究の方法

本研究では、明治維新にともなう武家の北海道移住とその後の共同体形成過程の検討を、巨理伊達家と富江五島家を対象に、現在にまで残された記録(アーカイブズ)の復元的検討から行う。そのためには、現地での所在資料の調査・整理・研究が欠かせない。具体的な調査地域は北海道(伊達市・札幌市・登別市・蘭越町)・宮城県(仙台市・多賀城市・白石市・巨理郡巨理町)・長崎県(長崎市・五島市)の資料保存機関および個人宅である。月1回程度、それぞれの地域において、資料整理・目録作成に取り組み、そのうえで、所蔵者・関係機関と連携をとりながら研究を進め、了解が得られた段階で、資料情報の公開、成果の発表を行う。

具体的な研究方法としては、移住武家(当主家・家臣団各家)/移住前の地域社会/移住後の地域社会(場所共同体(アイヌ・場所請負商人/和人))という、関連する地域と関係者に留意しつつ、とくに移住前後の地域社会の変容、あらたな地域社会の形成過程に焦点をあて、地域社会を復元する形で分析を行う。

## 4. 研究成果

本研究の成果はおもに(1)巨理伊達家の北海道移住に関する史料調査・整理、(2)巨理伊達家の北海道移住に関する研究、(3)東北・九州諸藩の北海道移住に関する基礎調査の3点である。

(1)については、関連する史料の所在する北海道伊達市・札幌市、宮城県仙台市・巨理郡巨理町・東京都・京都府での悉皆調査を終え、概ね史料調査を完了することが出来た。また、家臣団の史料についても、とくに伊達市での史料調査・整理を行い、多くの史料群の存在を確認することが出来た。これらの史料については、保存の手立ての構築も含めた、史料の発見と整理が大きな成果となる。

(2) 巨理伊達家の北海道移住について、ある程度の見通しとモデル化を行ったのが、本研究の最大の成果である。以下、その概要を示しておきたい。

本研究テーマは、明治維新後、北海道へ移住した武家を対象に、明治維新後、武家・武士がどのように新たな社会に対応したのか、どのような歴史的存在であったのかを検討するもので、研究にあたっては、アイヌ・和人との関係、記憶の継承（アーカイブズの伝来）を特に重視して進めている。すなわち、従来、開拓史と、その反射鏡としての被侵略史として明治初年の北海道史が描かれてきたが、予断にとらわれず、アイヌ・和人・開拓武家がどのように関係を構築していったのかを、復元的に検討することを目的としている。そのためには、現在に伝わる北海道移住武家の記録の発掘・検証が欠かせない。これは、近世やそれ以前の武家の記憶がどのように移住先へ持ち込まれるのか、その過程には、当時の社会のなかでアーカイブズが持っていた意味が刻印されているはずであり、アーカイブズの意味を問うことになると同時に、アイヌ・和人との間で構築された関係も、その多くは、移住武家のアーカイブズの中に記録されているのであり、両者は相互を補完する関係にあると考えるからである。以下、巨理伊達家と移住先の有珠郡に即して、得られた成果をまとめておく。

巨理伊達家の北海道移住は、明治維新の政治闘争の結果、敗軍となった仙台藩の矛盾解消のため、巨理伊達家中 1332 家の生計の途を得るべく、巨理伊達家が主体となって遂行された。移住先となった有珠郡は、有珠場所 有珠会所、場所を請け負っていた商人和賀屋とそのもとで働く支配人・番人、有珠場所周辺で暮らし和賀屋と交易を行うアイヌによる会所地域が形成され、さらに、幕府直営の牧と牧士、会所地域の人びとの信仰の拠点として有珠善光寺が所在していた。決して無人の荒野だったわけでは無い。有珠郡の領有権は、松前藩の時代は松前藩に、幕府直轄領時代は幕府にあった。巨理伊達家は有珠郡の領有を認められ移住を行う訳であるが、これまでの場所請負制度下の会所のように、漁業を管轄し交易を行うために数名の和人が住むのでは無く、地域の居住者として数百名の武家が移住するわけであるから、先住者であるアイヌとのコンタクトは不可避である。蝦夷地の支配は、松前藩・幕府・東北諸藩による北方警衛と数度変わったが、居住者として大規模の武家が移住してくるといふ、それまでに無かった大きな変化が起こる。

巨理伊達家も、領主としてアイヌ居住地を含めて管轄する権利を得るとはいえ、有珠郡の産業基盤はアイヌによる漁業であり、慣れない寒冷地での開拓を遂行するためにも、アイヌとの関係を慎重に構築する必要があった。巨理伊達家は、移住にさいし、アイヌとの関係を慎重に構築するよう訓示する一方、

開拓地を有珠会所の所在する有珠から離れた紋別に設定し、会所地域はそれまでどおり和賀屋に委任（105 両で請け負い）することにより、アイヌの権益を侵害すること無く開拓を進めようとした。

こうして、有珠地域を中心とした会所による漁業経営は近世以来のままで継続する一方、移住者達により紋別地域を中心に開拓が進展していくことになる。また、新たな領主として、アイヌと年中行事を通じた関係を取り結ぶことも行われていた。このように、有珠地域を中心に明治維新後の変化を見れば、新たな領主として巨理伊達家が任じられ、場所請負商人やアイヌと、それまで同様の関係を結んでいくことになる。一方で、漁業を基盤とした生活のなかでは居住に適さなかった地域が移住者によって開拓され、漁業では無く農業を基盤とした紋別地域があらたに形成されていくのである。こうした関係は明治 4 年まで続くが、廃藩置県を受け、有珠場所・会所が開拓使に収公されるとともに、巨理伊達家の移住者は、巨理伊達家家臣ではなく、開拓使貴属として有珠郡の住民となり、農業を基盤とした生活を続けていくことになる。明治 5 年頃には五穀の収穫が可能となるまで開拓が進み、「農」の実効を挙げるに至るのである。

一方、廃藩置県によって巨理伊達「家」という法的な組織は解体する。伊達達成と元家臣団を結ぶ法的な紐帯は無くなるが、それでも巨理伊達家を介した巨理郡から有珠郡への移住は続き、元家臣団たちは武家意識 家臣団意識を持ち続ける。その根拠となったのが、選別の上で巨理から持ち込んだ家伝来の資料 アーカイブズであり、そこに記された巨理伊達家当主との主従関係の痕跡である。巨理伊達家家臣団は、廃藩置県にさいして平民籍に編入されるが、それでも武士意識を持ち続けるため、屯田兵・西南戦争と積極的に従軍して新たな戦功 「武」の実効を挙げ、アーカイブズが証明する武家の由緒と併せて、明治 18 年にあらためて土族となることを求めて土族復籍運動を展開する。そして土族復籍に成功した巨理伊達家家臣団は、土族契約会を結成し、あらたな規範を制定する。開拓武士団にとって、「農」の実効を挙げて生計を立ててきたうえで武士としての意識を保つためには、内部の規範を新たに制定する必要があったのである。

(3) 東北・九州諸藩の北海道移住に関する基礎調査について。東北諸藩の北海道移住については、課題として掲げた白石片倉家を中心に多くの史料の所在が確認できた。九州諸藩の北海道移住については、課題として掲げた富江五島家について、多くの史料の存在を確認し、また、九州諸藩の北海道移住について、北海道立文書館所蔵の開拓使文書で移住の実態を確認することができた。ただし、当事者たる九州諸藩の史料では、主要史料の発見に至っていない。

本研究の成果として今後の課題となるのは、(2)で得られた見取り図が、(3)で得られた史料により、明治初年の北海道分領支配そのものを考えるうえで、普遍化が可能か、という点である。(3)で得られた史料の分析は充分に進んでいないが、片倉家、富江五島家に関する史料の分析からは、巨理伊達家 - 有珠郡に即して得られた見取り図と分析方法は、他の移住武家や移住者を受け入れた北海道各地域についてもある程度適用可能な、汎用性のある見取り図・分析方法であると考えられる。すなわち、移住武家(当主家 - 家臣団各家) / 移住前の地域社会 / 移住後の地域社会(場所共同体(アイヌ・場所請負商人 / 和人))という関係構造の中で、武家社会の解体過程という問題を踏まえつつ、明治初年の北海道分領支配を再検討する有効性を確認し得たことが、本研究の成果となる。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

三野行徳「明治維新と武家の北海道移住 - 有珠郡における新たな共同体形成 - 」(『旅の文化研究所 研究報告 no.23』2013年12月、旅の文化研究所発行)

〔学会発表〕(計1件)

三野行徳「村木孝英の近世・近代 - 近代社会のなかの巨理伊達家中 - 」(巨理町ものしり大学院)2015年3月6日

〔図書〕(計1件)

『北海道伊達市大雄寺所蔵 巨理伊達家中諸家文書目録』(巨理伊達家文書調査研究会・三野行徳)2014年10月

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

国内外の別:

取得状況(計 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

取得年月日:

国内外の別:

〔その他〕

ホームページ等

国立歴史民俗博物館 2013年度~2014年度  
科学研究費補助金・学術研究助成基金助成  
金:明治維新と武家の北海道移住に関する研究

[http://www.rekihaku.ac.jp/education\\_research/research/list/subsidy/2013/hokkaidou.html](http://www.rekihaku.ac.jp/education_research/research/list/subsidy/2013/hokkaidou.html)

#### 6. 研究組織

##### (1)研究代表者

三野 行徳(Mino Yukinori)

国立歴史民俗博物館 外来研究員

研究者番号:30714224

##### (2)研究分担者

( )

研究者番号:

##### (3)連携研究者

( )

研究者番号: